

に於てもその筆觸に内在的に含み多き味ひを醸すべきは推し得て、かくも示さざる事の稀れなるを思ひ、時代としての影響、畫家自身に於ける素質等特異な交錯の下にのみ此の畫在るを識る。繰返すまでもなく、些かなるものへの關心が、そは一朝に眺めやられて作上げられるものに非して、常住に感じつゝありしもの結果としてこの造形的な足跡を残す。之に伴ふ一種孤獨の感は禪宗文化に隨從し來るものながら、かく物に即して泌々と滲出す心情は僧ならずとして俗に住しても反省し味到せられる處であらう。かゝる表現のおそくに個性的に解せらるゝは、延いて一畫人として單庵を他より切離して明確な存在を主張するものであらう。之が大きな自由の感よりもかく閉された個性的な心情に即する故に或は足利期の主流の繪畫には遠きものなるを思ひ、かゝる畫の存在の忘却せられ易く、又時折の咏嘆に委せられ埋れやすきを思ひながら、猶ほ時代の一面面を物語るものとして又その深き玩味を要求するものである。(熊谷)

五、葛徵奇筆 水墨山水圖 東京 松岡於菴衛氏藏

綾本墨畫 掛幅 堅 四〇・三幅 横 八一・六幅

葛徵奇の畫は世に流傳するもの極めて乏しい、淺野梅堂の博覽を以てしてその漱芳閣書畫銘心錄に名を載せざるは固より、本國支那における著錄類を涉獵するも殆ど寥々晨星の觀がある、今葛徵奇といへば人は必ず岩崎男の所藏に係る溪陰鎖夏圖を想起する、然り彼一軸は唯一の徵奇畫であつて、そは恰も畫僧蘿窗が淺野家の一幅によつて傳はる如きものである、傳にいふ、徵奇名は無奇、介龜と號す、海寧の人、崇禎の進士、官光祿寺少卿に至り、告歸して湖山の間に放浪し、以て終る、蕪園詩集あり、間適の致あり、また善く山水を畫くと、斯人既に専門畫人に非ず、恐らく作る所もまた妙かつたのであらう。

頃日友人三成重敬君、山内容堂が嘗てその侍讀たりし土佐の學者故元老院議官松岡時敏に贈りしものとて容堂が例の山陽流もて箱に明葛徵奇水墨山水絹本の十字を書き付けたる一幀を携へ來つて、僕に示す。僕諦視數分始めて口を開

いて言ふ、此畫或は尋常鑑畫家者流以て葛徵奇畫とせざらんと計るべからず、岩崎男の彼畫に比するに風趣著しく相同じからざるものあれば也、然れどもその畫は斷じて俗士の能くすべき品彙匹儔にあらず、且や溪陰鎖夏圖と較ぶるに差別の裡平等の存するあり、疎樹門の如く相對するは其一、畫面の中心門樹の奥深く瀑布を落してその瀑布末に於て相分るゝは其二、この二つのものは恐らく葛氏の最も好む所にして、また實に餘家と類を異にして、徵奇畫を時流中に特立せしむる所以、題語の文字に至つても一見相距る遠きが如きも、例へば葛字と徵字と相結ぶあたりに痼癖の蔽ひ難きものあり、これ其三、思ふに彼は款識に崇禎甲戌七月の年紀あるに見るも壯年の作たること明かなるに反し、此は全く脂粉の香を脱却して枯淡の境に入れる老年の作なるのみ、暫く眞蹟を以て之を見做さんと欲すと。三敬君膝を打ちて、余も亦た然か思へりとして兩人相顧みて共に樂しむ。

思ふに斯畫の最も面白き點は草書の矢字なして落ち來る瀑布に在る、否、瀑布に對して一字横に架けたる石橋に在る、昔者藝阿彌は觀瀑僧を待つ一空屋を畫いてその構想の奇を謳はれたが、徵奇は一人の點景人物を容れず、畫に對する者をして擅まに畫中に入らんことを期待して居る、あゝ人待ち顔にも見ゆる石橋の面白さよ。用墨用筆の上より觀れば披麻皴に加へた焦墨の點苔が淡々しい畫面に能く活趣を與へて居ることを見逃すわけに行かない。畫は淡黃褐の紋綾の上に畫かれて居る、統本は明畫に多いが綾本なることが文人畫としてまた珍らしい風景を添へて居る。(協本)

六、七、日吉山王祭圖 京都 法林寺

四曲屏一雙 紙本着色 堅 一七〇・〇幅 横 三七四・八幅

慶長寛永を中心とする其の前後の風俗圖に諸社の祀祭の光景を圖するもの多く、其の最も代表的なものとしては、舊名古屋離宮障壁畫の一部、及び豐國神社藏豐國大明神臨時祭圖屏風等があるが、本圖も亦是等祀祭圖の類品の一とし